

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2015～2017

課題番号：15KT0124

研究課題名(和文)現代の西チベット、ラダックにおける紛争の形態と紛争解決戦略の分析

研究課題名(英文)An Analysis of Forms of Conflicts and Conflict Resolution Strategies in Ladakh, Western Tibet Today

研究代表者

煎本 孝 (IRIMOTO, Takashi)

北海道大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：50124227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ラダックにおける紛争の形態と歴史的背景、紛争解決戦略について分析した。ラダックの人々は、国際的に認知されたノーベル平和賞受賞者であり、非暴力の象徴であるダライ・ラマ14世を頂点とする、今やグローバル化したチベット仏教との連帯を強化することで国際的支持を味方につけ、カシミールのムスリムとその背後にあるパキスタンに対抗し、さらには中国に対峙しながら、同時にラダック人としての独自の伝統文化とアイデンティティの維持を図ることにより多民族間、多宗教間の共存に向けた倫理的戦略、文化的戦略、制度的戦略という多面的紛争解決戦略を有効に展開していることが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This study examines the historical background of conflicts and conflict resolution strategies in Ladakh. Buddhist Ladakhis have sought world support in dealing with Muslims in Kashmir and Pakistan, and in dealing with China, through strengthening their solidarity with the now-globalized Tibetan Buddhism, headed by the Dalai Lama XIV, an internationally recognized Nobel Peace Prize winner and a symbol of nonviolence. At the same time, Ladakhis are developing multifaceted conflict resolution strategies, i.e., ethical-, cultural-, and institutional strategies, toward a multiethnic and multi-religious coexistence while aiming at keeping their traditional culture and identity as Ladakhis. As a result, these conflict resolution strategies effectively function for achieving peace among the multiethnic and multi-religious peoples of Ladakh.

研究分野：人文学

キーワード：紛争 紛争解決 チベット ラダック

1. 研究開始当初の背景

(1) ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈に挟まれたラダック王国は、中央アジアとインドとを結ぶ国家間長距離交易路の拠点として1834年まで仏教王国として独立していたが、ドグラ王国に滅ぼされ、大英帝国領となった後、1947年以降は新たに独立したインドに帰属することとなった。パキスタン、チベット・中国との国境地帯のため、長期にわたり入域制限がとられていたが、1976年には外国人に対しても解放された。しかし、現在、観光・開発に伴う経済・文化資源をめぐり、ジャム・カシミール州の多数派を占めるムスリムとの対立が表面化し、1989年にムスリムと仏教徒の間に武力衝突が勃発し、一時入域制限地区となった。しかし、近年この制限が解かれ、外国人にも再び開かれることになった。もっとも、最近のラダックにおいても、ムスリムと仏教徒の間の民族的・宗教的対立は継続しており、また、ラダック西部におけるインドとパキスタンとの停戦ライン地帯での軍事的衝突は常態化している。さらには、インドと中国との未確定国境線をめぐり、ラダック北部および東部において頻繁にインド軍と中国軍による小競り合いが続いている。このように、ラダックは、地域内部、および外部にまたがる多様な紛争を抱えながら、現在、急激な現代化とグローバル化の只中にあり、人々の生活と価値観は大きく変化し、インターネットを通じたグローバルな情報の収集、発信が可能となってきた。

(2) 研究代表者は、従来から、紛争研究をアイデンティティという視点から分析してきた。広く東北アジア諸民族の文化復興とアイデンティティの形成、チベット難民における新しいエスニシティの形成に関する調査研究のみならず、マクロな視点からの紛争研究に関する国外の研究動向を把握してきた。その結果、紛争と紛争解決は外的条件のみならず、人々のアイデンティティと意識という内的条件という視点から解明する必要があることが明らかになった。

2. 研究の目的

(1) 本研究計画は、ラダックにおける紛争の形態の変化とその条件を明らかにし、その上で、ラダックの人々が現在の紛争の激化をいかに回避し、いかに解決しようとしているのかを、倫理的戦略、文化的戦略、制度的戦略という現在進行中の具体的活動からなる多面的紛争解決戦略に焦点を合わせ、記載、分析し、それらの有効性について検証する。

(2) 具体的には、ラダックにおける紛争の形態の変化とその条件を明らかにする。紛争回避、解決のためにとられる倫理的戦略、文化的戦略、制度的戦略という多面的紛争解決戦略の実態を明らかにする。ラダックの人々が、これらの多面的紛争解決戦略を選択

するに至った、外的条件と内的条件を分析し、さらに、紛争解決戦略の実践の効果을明らかにする。そして、ラダック人としてのアイデンティティを維持しながら、多民族間、多国家間の共存に向けた紛争解決戦略とその有効性について検証する。

3. 研究の方法

(1) インド国ジャム・カシミール州ラダックにおいて、フィールド調査を実施する。日本においては、文献資料調査、インターネットによって発信される情報の収集、および日本在住のラダック人における情報ネットワークの形成に関する調査を行う。これらの調査研究に基づき、資料の整理、分析を行い、研究会における発表、討論、レビュー、総括を経て、その成果をまとめる。

(2) フィールド調査における研究方法は、参与観察、聞き取り、デジタルカメラ、MDレコーダなどの機器によるフィールドデータの収集と記録、文献情報資料の収集からなり、情報データの整理、解析が行われる。

4. 研究成果

(1) 平成27年度においては、インド国ジャム・カシミール州ラダックにおいて、ラダックにおける紛争の形態の変化とその条件についてのフィールド調査を実施した。また、インド国カルナタカ州バイラクuppeにおけるダライ・ラマ法話に関する調査を実施し、紛争解決における倫理的戦略としてのダライ・ラマ14世の「世俗の倫理」の内容と普及、および仏教哲学における空と慈悲の観念に基づく「心の制御」の内容と実践に関する分析を行った。国内においては、紛争形態の変化とその条件について、文献資料調査、インターネットによって発信される情報の収集、および日本在住のラダック人における情報ネットワークの形成に関する調査を行った。また、ギリシャ、デルフィのヨーロッパ文化センターで開催された国際シャマニズム研究会第12回大会「聖なる場とシャマニズムにおける紛争転換、歴史、空間、力」に参加、研究発表を行い、中間研究成果のレビューを受けた。

平成28年度においては、紛争解決のための文化的戦略としてのラダック祭に関するフィールド調査資料の整理、分析を進めた。国内においては、ラダックからインターネットにより発信される情報の収集、分析、データベース化、および、日本在住のラダック人における情報ネットワークの形成に関する調査を行った。また、ノルウェーのベルゲン大学において開催された国際会議、第14回国際チベット学会セミナーに参加し、ラダックにおけるダライ・ラマ14世の平和維持における役割について研究発表し、中間研究成果についてのレビューを受けた。さらに、日本学術振興会で行われた特設分野研究代表

者交流会に出席し、現代の西チベット、ラダックにおける紛争の形態と紛争解決戦略の分析について進捗状況の発表、意見交換を行った。

平成 29 年度においては、紛争解決のための制度的戦略に関する分析のため、制度的戦略としてのラダックの政治的地位をめぐる改革要求運動に関するラダックでのフィールド調査、および紛争関係文献資料調査を行った。また、インド国ブッダガヤでのフィールド調査を行い、ダライ・ラマ 14 世の法話を通じた異なる宗教の平和的共存に向けたメッセージ発信の実態について検討した。国内においては、「ナマステ・インディア文化祭」(東京)におけるインド政府派遣北部芸能文化協会ラダック文化公演、および、「しあわせの経済世界フォーラム」(東京)に参加し、現代のラダックの文化、社会、経済活動と紛争解決の問題点に関する調査を行った。さらに、日本学術振興会で行われた特設分野研究代表者交流会に出席し、現代の西チベット、ラダックにおける紛争の形態と紛争解決戦略の分析についての発表、意見交換を行った。また、第 71 回日本人類学会大会シンポジウム(於東京大学)において、ラダックにおける紛争解決戦略と心の人類学に関する研究発表を行った。

(2) ラダックにおける紛争の歴史的背景の分析の結果、ラダック王国第 1 次王朝から第 2 次王朝を通して、イスラーム化したラダック西方隣接諸国からのラダック王国に対する攻略が続くことが明らかになった。その過程は、直接軍事行動と戦闘行動のみならず、ラダック国王とイスラーム王妃の婚姻という両国の姻戚関係の樹立という方法を伴うものであった。その結果、ラダックは仏教徒とムスリムを含む多民族・多宗教による共存社会を形成した。その後、ラダック王国はドグラ戦争(1834 年)により独立を失い、ジャム、ドグラ地方のグラブ・シン王の藩王国に統合され、インド独立後はジャム・カシミール州に含まれている。

ジャム・カシミール州における紛争の展開は、1947 年のインド独立後のカシミールの帰属問題に端を発するものであり、宗教間の対立があるとしても、ムスリムとヒンドゥー教徒間の対立であり、仏教徒とは本来は関係がないはずであった。しかし、ラダックがジャム・カシミール州に帰属したことによりラダック問題が喚起された。また近年の急激な現代化の中で、カシミール問題がラダック内部の問題と連動し、広範囲な政治・宗教対立を引き起こすに至った。その結果、仏教徒とムスリムという宗教的帰属性が両集団を政治的に分離する指標として働いたのである。

(3) 紛争解決における倫理的戦略として、ダライ・ラマの「心の制御」というメッセージを通して、ラダックにおけるムスリムと仏

教徒との間の民族的・宗教的対立による紛争の激化は効果的に回避されていることが明らかにされた。また、ラダック、とりわけレー地区においてはマイノリティーであるムスリムにとっては、ダライ・ラマ 14 世と友好関係を結ぶことは、ダライ・ラマ 14 世を通して仏教徒を制御することができるという利点があり、紛争激化の回避は、ムスリムにとっても望むところとなっている。ここでは、ダライ・ラマ 14 世はムスリムと仏教徒との間の衝突を停止させるための仲介者としての役割を果たすことが明らかにされた。

ラダックの仏教徒、チベット難民、ラダックのムスリム等の参加、協力のもと、毎年 9 月に 2 週間にわたって開催されるラダック祭という文化行事が、ラダック地区における多民族、多文化という特徴を演出することにより、人々の間に共存と調和という意識を醸成させ、紛争の激化の回避に貢献しており、紛争解決における文化的戦略としての意義をもつことが明らかにされた。

紛争解決における制度的戦略として、ムスリムと対立する仏教徒の政治的要求により、新たに採用されたインド国内法である指定部族法令(Scheduled Tribes Order)のもとでの、ラダック自治山麓開発協議会(Ladakh Autonomous Hill District Development Council)の設立の意義を検討した。これにより、政治的、経済的改革が進み、ムスリムと仏教徒との間の暴力的衝突が収束されてきた。ただし、仏教徒が進めてきた、ジャム・カシミール州からの分離・独立とインドにおける連邦直轄領地位(Union Territory Status)の要求運動には進展が見られず、ムスリムと仏教徒との間の緊張関係は継続することが明らかにされた。

この緊張を高めないように抑止するのが、ダライ・ラマ 14 世による「心の制御」という倫理的戦略であり、多民族、多文化、多宗教を容認するラダック祭を通じた文化的戦略であると解釈することができる。したがって、紛争解決における倫理的戦略、文化的戦略、制度的戦略は相互に補完し合いながら多面的紛争解決戦略として有効性を持つことが明らかにされた。

(4) これら一連の研究の結果、ラダックは広い意味でのチベット文化圏の一地域として位置づけられる一方で、人々は、独自の歴史的背景からチベット人ではなく「ラダック人」であるとのアイデンティティを維持していることが明らかになった。また、現在のラダック内におけるムスリムと仏教徒との間の民族的・宗教的対立、および、インド、パキスタン、中国との間の国際的緊張の中で、ラダックの人々は、ノーベル平和賞受賞者であり、非暴力の象徴であるダライ・ラマ 14 世を頂点とするチベット仏教との連帯を図ることで国際的支持を味方につけ、カシミールのムスリムとその背後にあるパキスタン

に対抗する戦略を採っていることが明らかになった。さらには中国に対峙しながら、同時にラダック人としての独自の伝統文化とアイデンティティの維持を図ることにより、ラダック地域内における多民族、多文化、多宗教の共存と調和に向けた戦略を展開していると結論づけることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

Irimoto, Takashi, 2018. An Analysis of Inter-ethnic-religious Conflicts and Conflict Resolutions in Ladakh, Western Tibet. *Tibetan Studies Association Bulletin*, No. 4, pp.1-14. (チベット学会報第 4 号、pp.1 - 14) (<http://d.hatena.ne.jp/tibetgakkai/>) (査読有)

Irimoto, Takashi, 2017. The significance of 'APE (Anthropology, Prehistory, and Ethnology) Association' today from an ethnological perspective. *Anthropological Science* 125 (3): 181. ISSN: 0918-7960. (査読有)

煎本 孝, 2017. 「民族学の立場から」シンポジウム「今、『エイプの会』の意義を考える」『第 71 回日本人類学会大会プログラム・抄録集(71st ASN 03-05 Nov. 2017)』p.71 (<http://anthrop-meeting.sakura.ne.jp/71/>)。 (査読有)

山田孝子, 2017. 「流動化する世界とコミュニケーションの共有性」(分科会要旨)『日本文化人類学会第 51 回研究大会発表要旨集』(2017 年 5 月 27 日~5 月 28 日、神戸大学) p. 27。(査読有)

Yamada, Takako, 2017. Shamanic Power as an Agent of Reconciling Communal Conflicts. *Shaman Journal of the International Society for Academic Research on Shamanism*, 25 (1-2): 159-180. ISSN: 1216-7827. (査読有)

Yamada, Takako, 2017. Shamanism and Buddhism as Religions Expanding the Boundaries of Ethnicities and Spirituality, *Books of Abstracts of International Conference on "Expanding Boundaries: Ethnicity, Materiality and Spirituality," Vietnam Museum of Ethnology, Hanoi, 1-4 Dec.2017*, pp. 112-113. (査読有)

煎本 孝, 2016. 「ダライ・ラマ法王によるタシルンポ僧院でのラムリム(菩提道次第)法話(1)」*Tibet Journal* (『チベット通信』) 2016, Summer, pp.22-25. (査読有)

煎本 孝, 2016. 「ダライ・ラマ法王によるタシルンポ僧院でのラムリム(菩提道次第)法話(2)」*Tibet Journal* (『チベット通信』) 2016, Autumn, pp.14-17. (査読有)

Yamada, Takako, 2015. Ladakhi Shaman in the Multireligious Milieu: An Agent of Incorporation and Mediation. *Shaman Journal of the International Society for Academic Research on Shamanism*, 23 (1-2): 191-209. ISSN: 1216-7827. (査読有)

[学会発表](計 10 件)

煎本 孝, 2017. 「研究進捗状況報告：現代の西チベット、ラダックにおける紛争の形態と紛争解決戦略の分析」『特設分野研究、研究代表者交流会』(日本学術振興会、東京都千代田区、2017 年 10 月 2 日)。

煎本 孝, 2017. 「民族学の立場から」シンポジウム「今、『エイプの会』の意義を考える」第 71 回日本人類学会大会(東京大学、東京都文京区、2017 年 11 月 3-5 日)。

山田孝子, 2017. 「流動化する世界とコミュニケーションの共有性」(分科会) 日本文化人類学会第 51 回研究大会(神戸大学、神戸市灘区、2017 年 5 月 27 日~5 月 28 日)。

Yamada, Takako, 2017. Shamanism and Buddhism as Religions Expanding the Boundaries of Ethnicities and Spirituality, International Conference on "Expanding Boundaries: Ethnicity, Materiality, and Spirituality", International Conference of ISARS (International Society for Academic Research on Shamanism), Vietnam Museum of Ethnology, Hanoi, Vietnam, December 1-4, 2017.

Irimoto, Takashi, 2016. The Role of the Dalai Lama in Peacekeeping in Ladakh, The 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (IATS). June 19-June 25, 2016. University of Bergen, Norway.

煎本 孝, 2016. 「研究進捗状況報告：現代の西チベット、ラダックにおける紛争の形態と紛争解決戦略の分析」『特設分野研究、研究代表者交流会』（日本学術振興会、東京都千代田区、2016年10月13日）。

Yamada, Takako, 2016. Panel: “Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies” East Asian Anthropological Association 2016 Annual Meeting, Hokkaido University, Sapporo, October 15-16, 2016.

煎本 孝, 2015 「現代の西チベット、ラダックにおける紛争の形態と紛争解決戦略の分析」『特設分野研究、研究代表者交流会』（日本学術振興会、東京都千代田区）2015年9月16日）。

煎本 孝, 2015 「人類学からみた紛争解決における心の役割」『シンポジウム「仏法はどう日本社会の為に役立つか」』（主催：ケンボ・ソダルジェ・リンポチェ 2015 年来日講演委員会）（大手町サンケイプラザ、東京都千代田区、2015年11月15日）。

Yamada, Takako, 2015. Shamanic Power as an Agent for Reconciling Communal Conflicts. Books of Abstracts, International Conference of ISARS, “Sacred Landscapes and Conflict Transformation: History, Space, Place and Power in Shamanism”, European Cultural Center of Delphi, Greece, October 9th-13th 2015, pp. 80-81. (www. Isars.org)

〔図書〕(計 1 件)

煎本 孝, 2017. 『人類学講座 第12巻 生態（新装版）』人類学講座編纂委員会編、東京、雄山閣。435（251 - 279, 297 - 312）頁。ISBN: 978-4-639-02516-0

6. 研究組織

(1) 研究代表者

煎本 孝 (IRIMOTO, Takashi)
北海道大学・文学研究科・名誉教授
研究者番号：5 0 1 2 4 2 2 7

(2) 研究分担者

山田 孝子 (YAMADA, Takako)
金沢星稜大学・人文学部・教授
研究者番号：2 0 2 9 3 8 3 9